

# 《Ceuvre tronquee》としてのバルザック 「村の司祭」とその増補の諸事情について (一)

渡 辺 捨 男

## 《Le Cure de Village》 comme nne oeuvre tronquee et l'anplibication bu roman.

Par

Suteo WATANABE

### 序 言

「英国史」などの邦訳で、我国にも広く紹介されている。アンドレ・モロワは、バルザックの伝記を発刊しているが、その本の名は「バルザック、すなわち、プロメテ」となっている。プロメテは人も知るとおり、ジュピターの命によりコオカサスの岩上に生きながら釘づけにされ、しかもとらわれのあいだじゅう、その肝臓は鷲に食われつづけているという。ギリシャ神話中の人物であって、私はこの書は読んでいないが、モロワはおそらくプロメテをもってバルザックの業苦の一生に比しているのであろう。

誰もが知ることであるから簡略にするすが、バルザックは19世紀を代表する小説家の偉材であるけれども、生涯を静観と孤独の創作境に自己を沈潜させることのできたやはり一方の雄、フローベールなどに比べると、彼の生涯は全く業苦の一生であった。若いときに試みた事業で破産して以来、常に借金に責められ、好きな家を得たかと思えばやがて金のためにそれを売払ったり、また彼の本を出版する業者とも経済上の理由で不和になることが多く、それとの離合常ならず、その面からもいろいろと心労にさいなまされたうえに、いまいった「プロメテ」に比せられるとおり、彼の技漸く熟しその制作が円熟の境に入ったとき、ポーランド系のハンスカ伯爵夫人なるひとに全く魂を奪われてしまい、ウクライナに住む彼女のもとへ赴くために制作上重大な時期に、半年、また一年ちかくも制作の筆を投げうったこともある。しかもそれが幸福な過程をたどったのならまだしもだが、この女性はバルザックの熱愛に必ずしもこたえたとはいえず、その夫君が亡くなってからもバルザックを容易にうけいれず、漸く彼との結婚を承諾したときは、バルザックは永年の労苦のために身心ともに疲へいし、彼女との結婚後数ヶ月で比較的短い一生を終ってしまっている（五十才）。

由来バルザックは彼の生きた19世紀前半、とくに王政復古期を舞台に、これを横割りにした歴史として小説の世界に描出しようとして独歩の構想を樹て、「パリ生活情景」「田園生活情景」「私生活情景」「軍隊生活情景」など、構想としては社会の諸階層にわたり、またあくまでパリを中心としつつも、生地ツール地方をはじめ国内各地の情景を叙述せんとし、長短90篇を超える小説を残したのではあるが、前述したさまざまな障害や情事の心労のため、生涯に成しとげ得たものは偉大ではあっても彼の實力から期待し得るものほどにはいかなかったことは事実である。未完結に終わった小説もかなりあるし（しかもそれらはかなりの傑作らしいも

のを含んでいる)。また書店から作品の予告を出しながら全く筆を染めなかったものもずいぶんある。

たとえば「軍隊生活情景」のごときは作品中相当の重要度を占めるはずのものであったが、果たされたものはほんの僅かのものである。多忙をきわめた彼は原稿のままでいろいろと推こうする時間はもたなかったほどであったが、印刷にまわしたあと、その校正のさいに、原稿が全く新しくなるほどに訂正加筆することもあったし、とくに一度出版したあとでつぎに版を重ねるときに、構成をすっかり変えてしまうほどの加筆変改を行うなど、ほかの作家には見られない荒業をやったのけたこともある。だから彼の小説の完成の日附は、その決定版にいたるまで数年にまたがっていることがある。

「村の司祭」という小説もそうした運命をたどっているものであって、詳細は省くが現在のいろいろのバルザック全集はすべて1845年以降のFURNE版と呼ばれるもののテキストを採用しているが、この小説が定着した1845年より6年以前のいわばその原型ともいべき1839年版を私は最近入手することができた（文献欄参照）。この版は現行本とは全然構成を異にしているのみならず、現行本ではこの39年版にくらべると5対3くらいの量にふくれあがっており、39年版で見られなかった重要人物も何人か新たに登場しているといったありさまである。私は二年前に、ふつうの全集版によりこの小説に拙注をほどこして発刊したが、そのさい紙数の関係でその「解説」で述べ得なかったことをここで述べたいのであるが、とりわけバルザックがこの小説は一応発表したもののこのままの姿では、片輪のもの（tronqué）にすぎず、さらに大幅な増補を要することを書簡（後述）で明言している点につき考察し、さらに残された資料により作者が終局において達しようとしていたこの小説の理想像といったものに言及してみたいのである。

私はここで先づこの小説の題名から出発したいと思う。この小説は彼の全作品の中でもかなり膨大なものにぞくし、コナール版で287頁におよんでいる。ところが題名たる「村の司祭」である司祭ボネ師が現れるのはそのうち僅か30頁余である。もちろんこの聖職者の忠告があってはじめて本篇の実質的主人公たるヴェロニックという女性が僻地に大きな社会事業を達成するはこびとなるので、その使命は重要であったとはいえるだろうが、小説中その占めるスペースがあまりに少いことはいかにも不審である。「コメディ・ユメヌ登場人物目録」（文献欄参照）という書で、Dr. Lotteはこの小説のやや重要な人物にそれぞれ記述を与えているが、それによるとボネ師に関する記述は、実質的の主人公たるヴェロニックから数えて、9番目の分量しかもっていない。従ってほとんど「端役」なみの分量しかしめていないのである。またBruxelleのKi Wistというひとは、この小説の登場人物の重要度に等位を附し、いまいったヴェロニックから数えて、ボネ師は第6位にあるにすぎぬとしている。いわば、こうした実質的に「端役」的な人物をなぜ作者はこの小説の題名にえらんだか、その点を究明すればバルザック自らこの小説を「片輪のもの」と断じた意味も明かになると信ずるのである。

#### 参 考 文 献

- Balzac (H. de), (1952), La Comédie Humaine (Ed, Conard) (TOME 25)  
Bardèche, M. (Reprint 1967), Balzac, romancier.  
Bellesort, A. (1946), Balzac et son oeuvre.  
Dr. Lotte, Répertoire des Personnages de la Comédie Humaine.  
《Le Curé de Village》 Version de 1839 (Reprint 1961 Bruxelles).